令和　6　年度　学校評価総括表　　学校名　生駒市立生駒東小学校　　所属長名　増田　智子　印

Ⅰ 学校教育目標	広く世界に目を向け、自分らしく生きることができる力を身につけ、自他を大切にする心と新しいことにチャレンジする心を育てる。																		
Ⅱ 前年度に残された課題																	Ⅳ 来年度に残された課題		
①低学年から系統立てて指導するために、各学年での指導内容を明確にしてきたが、評価方法や児童の								①体育科の授業や朝の時間に体操を計画的に行い、本校の課題である柔軟性や筋力の向上をめざす。また、授業のウォーミングアップ等を活用し、自分た									①本校児童の課題である「投の運動」と「柔軟性」について、授業のウォーミングアップ等		
	[2]具体的達成目標と評価指標		[3]自己評価				[4]外部アンケートの分析					[5]自己評価					[6]学校関係者評価		
（重点課題番号）［評価項目］1	具体的に、何を、いつまでに、どの水準まで、数値化			中間評価			児童生徒アンケート			保護者アンケート				最終評価（成果と課題）		課題の改善策等	評価者人数　6人		
				評価日　8月下旬			実施日　12月上旬			実施日　12月上旬				評価日		2月28日	評価日　3月4日		
	公表日　5月27日　6月12日			公表日　10月1日　11月1日			公表日　3月4日　3月21日			公表日　3月4日　3月21日				公表日　3月4日		3月21日	公表日　3月21日		
	公表方法	二 ホームページ ☑ 文書配布 ☑ 説明会実施 二 その他	評定	公表方法	☑ ホームページ ☑ 文書配布 ☑ 説明会実施 二 その他		公表方法	☑ ホームページ ☑ 文書配布 ☑ 説明会実施 二 その他		公表方法	☑ ホームページ ☑ 文書配布 ☑ 説明会実施 二 その他		評定	公表方法		☑ ホームページ ☑ 文書配布 ☑ 説明会実施 二 その他	公表方法	☑ ホームページ ☑ 文書配布 ☑ 説明会実施 二 その他	
1	○朝の体操を計画的に実施できるように、年間計画を作成する。具体的な動きがわかるように動画を作成する。 ・朝の運動タイムを年5回実施し、学年全体で取り組むことによって、体を動かすことへの意欲を高める。また、運動集会への参加意欲へとつなげる。 ・仲間と楽しく身体を動かすことができるように、各学級で学級遊びを行ったり、運動集会への参加を促す。 ・学習カードを活用し、自分の運動技能の伸長に着目できるようにする。 ・「運動（体育の授業・外遊びも含む）することが楽しい」と答える児童が80%以上いる。 ・「体育の勉強でできることが増えた」と答える児童が80%以上いる。		A	○「運動することが楽しい」と感じている児童は9割を超えている中で、高学年になるにつれて数値が下がっている傾向がある。しかし、3つ目の設問の「体育の授業を、一生懸命できましたか。」や4つ目の設問の「体育の授業を通して、できることが増えたり、記録を伸ばしたりできましたか。」では、肯定的な回答をした児童の割合がどちらも90パーセントを超えていた。達成感を得ることができている現状から、高学年へのアプローチとして、引き続き自らの成長を喜ぶことができる機会を大切にし、運動への楽しさへとつなげていきたい。 ○学習カードは学年によって児童の実態にあったものを活用できている。高学年が進むにつれてタブレットを活用している例が多く、学習カードに動画を添付したり、より具体的に振り返ることができている。			○一学期と比べると、「設問1」「設問3」「設問4」に関しては、全体の肯定的な意見の割合が増えている。設問2「休み時間に、外で元気にからだを動かしましたか。（委員会・当番は除く）」に関しては、一学期よりも肯定的な意見の割合が減っている。理由として、2学期の行事による休み時間の取組、疲れ、それに伴う学習の遅れや補充。季節の変化等に加え、外遊びより中遊びの方が好きという意見も多くあがっている。設問1「運動することが楽しい」の割合が増えていることから、外遊びをしていない＝体を動かすことが楽しくないというわけでないことが考察できる。 ○学習カードに関しては、1学期に引き続き、学年によって児童の実態に合ったものを活用できている。自分の目標を設定し、それぞれが達成感を得ることのできるような時間にしていきたい。			○「学校は、子どもの体力向上に取り組んでいる」の項目で肯定的な意見が94%で、前年度に比べると5%ほど増加していた。 ○運動集会や、日々の体育授業での達成感や自信、悔しさなどを児童がしっかりと感じられていることから、保護者の方にも学校での取り組みが伝わっているのではないかと考えられる。 ○運動タイムや朝の体操を継続して行い、児童の体力の高まりをより実感できるように、体力テストなどの目に見える形でも成果を上げていく必要がある。	A	○朝の体操を計画的に実施できた。具体的な動きがわかるように動画を作成した。 ○朝の運動タイムを年5回実施し、学年全体で取り組むことによって、体を動かすことへの意欲を高めた。また、運動集会への参加意欲へとつながった。 ○仲間と楽しく身体を動かすことができるように、各学級で学級遊びを行ったり、運動集会への参加を促した。 ○各学年の児童の実態に合わせた、学習カードを活用することで、自分の運動技能の伸長に着目することができた。 ○児童アンケートより、「運動（体育の授業・外遊びも含む）することが楽しい」と答える児童が８０%以上を超えている。 ○児童アンケートより、「体育の勉強でできることが増えた」と答える児童が８０%以上を超えている。 ○投の運動と柔軟性に課題がある。	○朝のストレッチに投運動に必要な体の使い方を取り入れたものを加える。 ○体育の授業での体つくり運動に、投運動や柔軟性を高めるような内容を意識して行い、年間を通して課題改善に取り組む。 ○課題改善に繋がる校内研修に取り組む。	・低学年の間は外で体を動かすことが多いが、高学年になると友達同士でお喋りをするといったことが増えてくる。外で体を動かすということも大切なことだが、お喋りをして友達同士でコミュニケーションをとるということを考えると、それも同じく大切なことなのではないか。評価項目の在り方について再考してみるとよいのではないか。
2	○児童の児童の多様性を育むために、教師が率先して、児童のよさや違いを認めていくようにする。 ○ぽかぽか言葉の指導を行い、日常的にぽかぽか言葉を意識させる。 ○すべての児童がわかりやすい授業を目指す。 ○すべての児童に活躍の場を与える。 以上の取り組みから 「なかまとともに学ぶことを楽しい」と感じている児童を90%以上、 「相手のことを考えてやさしく声かけをできた」と答えた児童が90%以上を目指す。		A	○「友だちと活動をするのが楽しい」と肯定的に回答した児童は、90%を超えている。多くの児童が楽しく過ごせているが、14名の児童が楽しくないと答えているので、その児童の様子に気を配る必要がある。 ○「やさしく声掛けができた」と肯定的に答えている児童は、こちらも90%を超えている。優しい言葉をかけることは相手を大切にすることで、優しい言葉がけが温かい雰囲気を作るので、引き続き言葉遣いというのは指導していきたい。 ○児童アンケートで否定的な回答をした児童は、どの質問でも同じような児童である傾向がある。自己肯定感の低さから前向きになれなかったり、友だちの良いところに目を向けることができなかったりということがあると思う。がんばりを認めることやありのままを肯定してあげることで、その児童たちの自己肯定感を高めることも意識したい。			○「友だちと活動するのは楽しい。」の質問には、どの学年も9割以上の児童が肯定的に答えている。2学期は行事が多く、その中で集団として一つのものを作り上げていくことがあり、友だちと関わり合う楽しさを感じている児童が多くいたと考えられる。 行事だけではなく、普段から仲間と協力していけるような関わり合いをしていくことが大切だと感じる。 ○多くの児童が友だちの頑張る様子に刺激を受けている様子が見られる。3学期は短縄などの取り組みでお互いに切磋琢磨しながら高め合ってほしいと思う。 ○多くの児童が友だちに対して優しく言葉をかけることができている。その一方で、深く考えずに相手を傷つける言葉を発している場面も見受けられる。言葉の重みというのをその都度考えさせないといけないと考える。 優しく言葉をかけてもらえたと回答した児童は1学期よりも増えている。児童同士の関係が深まったことやそれぞれの児童の自己肯定感の高まりが要因ではないかと考えられる。			○「子どもは、友だちと仲良く学校生活を送っている。」は、肯定的な意見が93.3%、「学校は、子どもたちに思いやりの心をもたせ、あたたかい学級・学校づくりに取り組んでいる。」は、90.9%と、ともに肯定的な意見が多くなっている。あたたかい学校・学級づくりに取り組んできた成果と考える。 ○しかし、「あたたかい学校・学級づくりに取り組んでいる」の項目は「よくあてはまる」と回答した割合が5ポイント近く減っている。引き続き、お互いのよいところを認め合える集団作りを進めていく必要がある。また、「わからない」と回答している割合が6%である。来年度は、9月に参観日が設定されていたり、音楽会を保護者に公開したりと今年度より児童の活動を見てもらう機会が多くなっている。児童の様子や学級の雰囲気を見て、安心してもらえるようにしたい。	A	○児童アンケートで、「友だちと活動するのが楽しい。」や「友だちが頑張る様子を見て、自分もがんばろうと思えた。」の質問に肯定的に答えた児童がともに９０%をこえている。多くの児童がお互いに刺激を受け合っている。その一方で否定的に回答している児童も少なからずいる。 ○職員研修で性の多様性について研修を深め、全校集会で児童に性や自分らしさについて考えてもらう時間を取ることができた。それをもとに各学級で深めることができた。 ○児童アンケートからも分かる通り、お互いに優しく言葉をかけることができる児童が多い一方で、様子を見ている深く考えずに相手を傷つけるような言動が見受けられる。相手の気持ちを察することができていないということや知らないということから言ってしまうということが理由として考えられる。	○すべての児童が安心して過ごすことができるように、周りからの受容的な雰囲気づくりや小さな成功体験を積めるようにしていきたい。また、学校が楽しいと感じられるように活躍できる場を設定することや、教師のポジティブな働きかけを意識していきたい。 ○人権課題について考える機会を多くとることが児童の人権意識の向上につながると考える。しかし、これまでは人権課題について意識して取り組めていなかった。各学年での指導内容について整理して、人権教育のねらいや人権課題について意識して取り組めるように計画を立てていきたい。	・今回のアンケートで児童の評価が高く、素晴らしいことだと思った。将来、社会に出ていく子どもたちには人格的な面での指導が重要である。その上で、人権の取組が全体的に高評価であったことを評価したい。
3	○年間目標、生活目標を各教室に掲示し、児童が目標を意識し過ごしやすい環境を整える。 ○委員会の児童や高学年児童を中心に、全校児童に廊下歩行や安全な過ごしかの声かけを行い、定着を図る。 →廊下歩行の約束を守れたと答える児童が85%程度存在する。 ○サイレント掃除を意識する中で、集中し、安全に清掃活動を行う大切さに気づくを育てる。 →サイレント掃除を意識し、集中力を保つ掃除ができたと答える児童が80%程度存在する。 ○相手の心に届く、積極的なあいさつができる児童の心を育成する。 →相手の心にとどくあいさつができたと感じている児童が90%以上いる。 ○夏季休業中に、廊下中央の印を描き直し、右側通行が意識できる環境を整える。		B	○廊下歩行・右側通行 全体的に廊下歩行ができていると回答する児童が大半であるが、できていないと回答する児童は各学年2割程度存在する。この事項に関しては、学校全体の安全面・規律面から限りなく100%に近づけることが必要であると考える。「頭ではわかっているが、行動に移せない」や、「わかっているが、急いでいるから」という理由で守れていない児童がほとんどであった。 →『『前もって～しておく』という計画性のを身につける必要性」 「後の行動を考えて行動する習慣の未定着」が考えられる。改善案として、「授業後、次の授業の準備をしてから行動させる指導」「予鈴が聞こえたら、今している行動をすぐにやめる決断力を持たせる指導」を取り入れていくことが有効である。 ○サイレント掃除 余計な話をせず掃除が全学年共通してできていないことがわかる。 1学期にサイレント掃除の目的については共有し、統一した指導をしている。1学期同様、全学年を通して完全なサイレントは実現できていない。できていないと回答した児童のほとんどは、「伝えることがあった」である。 →「児童側にサイレント掃除の意義・目的」『『前もって～』という計画性を身につける必要性」があると考える。 改善案として、2学期当初同様に『サイレント掃除の目的」「サイレント掃除をすることで、どんなカをつけてほしいか」「どんな学年に育ってほしいか」について、学年の実態に合わせて指導を取り入れていくことが有効であると考える。また登校後、当番活動も確認し、サポートが必要である箇所をチェック&手配の準備、担当の確認を済ませておく習慣をつけさせていく。※次学年を見据えて3学期に定着に向けて指導していく。 ○ あいさつ あいさつに関しては、児童・教職員側も肯定的に捉えていることから、引き続き、挨拶指導を積極的にしていくことが望ましいと考える。			○ 廊下歩行・右側通行 『廊下では、右側を歩くことができたか』という項目では、1学期と比較すると変動があまり見られない。理由である「急いでいたから」と回答した児童は増加していることから、気持ちを落ち着けて行動できていない児童が増えていることがわかる。2学期は行事が立て続けに存在したことから高学年を中心に「急いでいた」と回答している児童が増えていると考えられる。教師からの声掛けはやはり同様量だが、どれだけ忠じてもた児童が自発的に守ろうと思うようそのものを育てることが重要であるため、「なぜ廊下を歩かないといけないのだろう」と思考を巡らせる声かけをこれからも取り入れていくことが有効だと考える。 ○生活目標について 『学期同様児童の回答結果から、「忘れていた」と回答している児童が増えている。毎月の目標を月初めに掲げて意識できているようだが、中旬・下旬になってくるとなかなか意識できていないこともあるようである。職員側も毎日意識しているかと言われれば意識できていないことが多いため、こまめに声をかけていく必要がある。 そこで、「今週はどうだったかな？」と週末に振り返ることができる声掛けを教師がしたり、放送委員会により啓発したり、児童の目に付く場所に掲示したりすることにより意識できるようになると考えられる。 ○サイレント掃除 全くしゃべってはいけなかった従来のサイレント掃除ではなく、期待される効果を考えるサイレント掃除を児童に伝えてきた！2学期であった。1学期と2学期では肯定的に回答している児童の割合は変動がないが、理由で「楽しくなって話してしまった」と回答している児童が増加している。運営委員会の取組や学校全体の取組により、友達同士声を掛け合ったり、相談したりすることの良さに気づき始めてもこども見られるが、楽しくなってしまい関係のない話をすることで掃除が滞ってしまうことは避けなければならない。学校全体掃除時間では集中して3学期、引き続き『掃除に集中する力』と『自分達が過ごす場所は自分たちで気持ちよくするという情風感』を育てるとともに、「なぜ掃除に関係のない話をするデメリット」についても児童に考えさせていきたい。これらの力をしっかり定着させたうえで、次年度以降の児童が「感謝する掃除」「考える掃除」という高いレベルの掃除につなげていきたい。 ○あいさつ 基本的に肯定的に回答できている児童が全学年を通じてとても多い。 しかし、回答結果とは裏腹に、仲の良い友達には自分からできていることが多いが、それ以外の場面ではできていない児童もいることや、も事実である。従来のように『あいさつをしなさい』と指導することも大事であるが、『あいさつによって相手にあえる印象』や自分が獲得できる効果を児童が考える機会をもったり、考えられるような声掛けをしたりする場面を取り入れていくことが効果的と考えられる。どんな相手であっても挨拶を自発的にできる児童を育成につなげていきたい。			○「自分や相手を大切にするためにルールを守って生活しようとしている」では96.4%が肯定的な回答をしている。自分だけではなく友達と生活する学校という公共の場でルールを守って過ごすことが大事であるという認識が学校家庭と共通して存在し、これからも児童を支援し続けていくことが有効であるとわかる。 ○「子どもは、自分から伊あてに伝わるあいさつをしようとしている」では、81.2%が肯定的な回答をしている。しかしながら、「どちらかといえば」あてはまる」と回答している保護者が55.7%を占めていることから、保護者が思い描く児童の育ってほしい姿まで児童の実態が育ち切っていないことが考えられる。あいさつにおける声の大きさや気持ちのこもった挨拶の実現に向けて、学校でも指導していく必要があると思える結果といえる。	B	廊下歩行については、ほとんどの児童が守ろうとしていることがわかってきた。ルールを守ろうとする姿勢はもちろんだが、他者を大事にしようとすることからも廊下を歩こうとする気持ちが育ってきたことが成果として挙げられる。 児童アンケートの結果考察を活かし、生活目標を意識下に挙げ、目的意識をもって生活することができるように取り組んできた。成果としては、児童に視覚的に支援することができ、目標を意識し、声をかけ合う姿が増えた。課題として、生徒指導の目標のみならず、児童の実態を踏まえて人権・特支的な面を取り入れてみると児童の成長につなげることができたという課題が残る。 掃除については、なぜ掃除に集中するのか考えながら取り組む大切さを根付かせることができたことが成果として挙げられる。サイレント掃除で獲得したかった能力は根付いたが、考えて掃除したり、仲間と協力しながら掃除する経験を育てていく中で、児童の心を育てていくことが来年度以降の課題として挙げられる。 あいさつについては、「相手に届くあいさつをする」と肯定的に回答している児童がほとんどである。しかし、「相手に届く」という捉え方が人それぞれ違い、自分ではできているつもりでも、相手にとってはしてもらっていないと感じることもあることが課題として挙げられる。	廊下歩行については、引き続き児童が他者を意識したり、ルールを守る心を育てることを視野に入れ、指導していく。来年度、生徒指導・人権教育・特別支援の３つが同じ部会として活動していくことを受け、今年度の児童の実態を活かして目標を設定していくことが改善案として挙げられる。掃除については、長年続けてきた「サイレント掃除」から「考え、感謝する掃除」に移行することが決定している。その中で、今まで培ってきた掃除に集中する力を基盤に、友達の困り感や学級の課題に目を向け、「自分がどのように掃けばみんなのためになるだろうか」という眼を育てていく。 あいさつについては、「仲の良い友達」にはもちろんだが、「誰であってもあいさつをする大切さ」について全教職員で共通認識をもって声をかけていく。	・生徒指導についての評価が児童の評価を基に評価されているが、課題として教師間の情報共有が挙げられているので、組織の中での情報共有の在り方についての評価指標があるとよいのではないか。 ・教員アンケートの中で機能的な校務分掌が課題として挙がっていたが、学校の規模が小さくなってきて教員数が減り一人一人の教員の負担が増えている。学校は、大変な状況をもっと発信し、地域に頼っていったらいいと思う。すると、いろいろな人が学校に関わることになり、それが子どもたちの豊かな成長へとつながるのではないか。 ・アンケート結果の提示だけでなく、PDCAサイクルのC・Aの部分を具体的に提示してもらうと、客観的に学校評価をすることができるのではないか。 ・SSWやSCなど新しい視点を生徒指導に取り込み、組織的に対応していくとよい。
4	○気持ちを豊かなものにするために、言語活動の充実を図り、自分の思いや意見といった気持ちを伝え合う授業を工夫をする。 ○より良い話し方・聞き方が身に付き、主体的に自己を表現できるようになるために、国語科の「話すこと・聞くこと」を中心とした言語活動において、話す内容の可視化、発表の方法や要点等に気付かせる支援の方法を工夫する。 ○伝え合うことの喜びや楽しさを感じ、表現することへの意欲を高めるために、身に付けた技能を生かす授業を創造する。 ○自分の考えを伝えたり、交流を通して仲間との学び合いにより、「人との関わり」を大切にした授業展開を行う。 ○「相手に自分の考えを伝えることができた」「相手の考えを知ることができた」「友達の考えや意見を聞いて、考えを深めることができた」と答える児童がそれぞれ80%以上いる。		B	○「相手に自分の考えを伝えることができた」「友達の考えや意見を聞いて、考えを深めることができた」の問いでは、どちらも「できた」や「どちらかというとできた」と答えた児童はどちらも9割以上であった。また「話し合い活動等の中で自分の思いを伝えたり、相手の考えや意見を聞いたりすることができた」の問いでも、9割以上の児童が肯定的な回答をしていた。国語科の「話すこと・聞くこと」を中心に、具体的な話し合い活動等の言語活動を取り入れ、授業実践に取り組めた結果であると言える。 ○一方で、聞くことよりも話すことの方が「できなかった」と回答する児童が数ポイント多いことから、聞くことよりも話すことの方に苦手意識をもっている児童が少なからずいることが分かる。引き続き、ペア学習やグループ学習などを行い意見や考えを述べる機会を多く設定したり、発表の仕方のモデルを見せることで自信をもって発言できるようにしたりする等、支援の方法を工夫していく。また、聞くことにおいても、より考えを深める聞き方について学年の実態に応じて伝えていく必要がある。 ○二学期以降も、国語科を中心に言語活動を通して「話すこと・聞くこと」の力を付ける授業実践をしていくとともに、実生活に結び付いてその力を発揮できるよう、様々な教科の中で協同的な学びの実践をしていく。			○一学期に引き続き「相手に自分の考えを伝えることができた」「友達の考えや意見を聞いて、考えを深めることができた」共に、9割以上の児童が「できた」「どちらかというとできた」と答えており、2年間授業改善に取り組んできた結果であると考える。 ○国語科のみではなく、様々な教科の中でペア学習やグループ学習に取り組む中で、国語科で付けた「話す・聞く」の力を活用させていきたい。しかし実態としては、言語活動として設定している場面での話合い活動は活発にできているものの、生活の中での話合いでは相手の話を受けて自分の意見を言えていない等の課題がある。			○「子どもは、進んで自分の気持ちや考えを伝え合おうとしている。」では、肯定的な回答が77.2%、「子どもは、落ち着いて、人の話を聞いたり、自分の考えを話したりできるようになってきている。」では、肯定的な意見が82.6%だった。「できた」と感じている児童が9割以上いる中で、10ポイント前後の差異がある。これは、本年度2学期に学習の様子を参観する機会がなかったので、児童が授業の中でどのように話合いをしているのか知ることができなかったためだと考えられる。また、国語科で付けた「話す・聞く」の力を生活の中や家庭の中で活用することができていないことも要因であると考えられる。	B	本年度は国語科の「話す聞く」単元において、相手に自分の考えや意見を伝えること（話し方）や相手の考えや意見を知ること（聞き方）に研修の重点を置いた。 子ども達の実態として9割以上の児童が「話すこと・聞くこと」の力が付いたと実感している。また、2年間の授業作りの検討で様々なワークシートや授業の展開が生駒東小学校の中に蓄えることができた。 しかし、保護者アンケートにて、児童の国語科で身に付けた力を家庭で実感できていないことや、実生活の中で国語科で付けた力を十分に活用できていない様子があることを考えると、様々な教科の中で国語科で付けた力（エ　話し手の意図をとらえながら聞き，自分の意見と比べるなどして考えをまとめること。等）を活用しながら、協働的に学ぶカを身に付けていくことで、実生活の中でも活用できる力を付ける必要がある。	国語科で付けた力を実生活に活用することができるようにするという本校の課題や、生駒市教育大綱で個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指すことが周知されたことから、来年度の研修テーマを「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」とする。教科を限定せず、研修テーマに沿った授業提案を行えるようにする。 児童に学習を委ねるためには、どのような授業の流れを作るか、どのようなワークシートや学習計画表が有効であるか等を各学年部で共有しながら研修を深める。	・保護者による「児童の能動的なコミュニケーション活動」の肯定的評価が下がってきているのは、行事が減っていることも原因の１つではないか。子どもたちが生き生きと学校生活を送り、東小の卒業生としての誇りを持つことができるような取組をしていってほしい。